

フンボルトの教養旅行

桜井佳樹

はじめに

フンボルト (Wilhelm von Humboldt, 1767-1835) の旅日記¹⁾ (1788. 9. 18~11. 8) は、当時の社会情勢を知るための貴重な資料である。ゲッティンゲン大学の法学生であり、ベルリンの貴族の子弟であったフンボルトが行った旅行の足跡を辿ることによって、フンボルトがどのような現実の中で生きており、かつそれを解釈していたのか、18世紀後半のドイツ (神聖ローマ帝国) という一定の制約 (客観的現実) にありながらも、将来を見据えながらどのような問題意識を醸成しようとしていたのか、その一端を垣間見ることができるように思われる。

この旅日記を繙くと、フンボルトが何よりも眼の人であり、観察眼が鋭い人物。さらに耳の人であり多くの人々から様々なことを聞き出していることに驚く。先々の都市で中枢の人々と交流しつつ、様々な問題について議論し、それを書き留める。決して専門的な調査旅行ではなく、単なる観光旅行や感傷旅行でもない。まさに教養旅行と呼ぶに相応しいのではなかろうか。効率的な消費行動としての旅行に慣れた現代人の旅概念を揺さぶり、旅とは何か、教養とは何かについて考察を促す、18世紀末のドイツの一貴族学生のライフドキュメント²⁾である。

I 旅行の行程と概要

1. アロルゼン (Arolsen 9/19-9/21 到着日-出発日、以下同じ)

フンボルトは1788年9月18日ゲッティンゲンを出発し、その日はカッセルに一泊した。この旅日記にはすべての日の日記が揃っているわけではない。「ゲッティンゲンからカッセルを経由してアロルゼンへ」³⁾で始まる文章は、すでに9月19日の日付になっている。フンボルトは従者のヨハン (Johann)、ロンドンの医者クリヒトン (Alexander Crichton, 1768-1816) と共に旅を始めた。クリヒトンとの主たる会話はベルリンのサロン「育徳同盟 Veredlungsbund」の女主人のヘンリエット・ヘルツ (Henriette Herz, geb de Lemos, 1764-1847)⁴⁾に関することであった。

アロルゼンではまず、図書館員のクーン (Ernst Wilhelm Cuhn, 1756-1809) の案内で、アロルゼンが所属するヴァルデック (Waldeck) 侯国の政治社会、特に侯爵 (Friedrich Fürst von Waldeck, 1743-1812) と身分制議会の関係についての情報を得た。騎士階級と市民で構成されている身分制議会の同意なしには新税を作れないなど、財政問題において侯爵は一定の譲歩をしている。

9月20日、ベルリン時代からの親友であり、フンボルトの思想形成にも大きな影響を与えた人物⁵⁾、シュティーグリッツ (Israel (Johann) Stieglitz 1767-1840) の家族を訪問した。フンボルトは父親に対して侯爵に関わるあらゆる事柄について質問した。ヘッセン・カッセル方伯 (Landgraf) が、主たる債権者であり、侯爵は1200000ターラーを借りている。そのため若干の役所が抵当に入れられ、その収入が利子の支払い等に規定されていること。侯爵は裕福な貴族の娘と結婚して借金を返済しようと計画したが、侯爵の血と貴族の血を混ぜたくないというドイツ侯爵の誇りが障害と

なり実現しなかった。さらに枢密顧問官ヘルマンの娘ロッテに恋をし、この貴族でさえない娘と結婚しようと、街の館を建てさせたのだが、侯爵の母や姉妹たちの反対にあって断念したのである、と。

宿舎に戻り陸軍少佐の訪問を受けた後、宮廷付牧師シュタインメッツ (Johann Franz Christoph Steinmetz, 1730-1791) を30分訪れ、宗教令について意見交換した。彼は考えが分からないように巧みに話したが、そうした強制はたしかに必要なが、我々の時代状況やプロイセンの聖職者の考え方がそのような宗教令を必要せしめたのだという意見であったように見えた。

フンボルトは侯爵に会う前に、宮殿を案内してもらった。侯爵の小部屋を気に入ったが、彼の仕事机に対峙してメンデルスゾーン (Moses Mendelssohn, 1729-1786) の胸像が置かれ、机の後ろのたんすの上にはソクラテスの胸像、壁にはフリードリヒ2世 (Friedrich II, der Große 1712-1786, 在位1740-1786) 等の絵が掛けられていた⁶⁾。馬車による遠乗りから帰ってきた侯爵にフンボルトは会ったが、彼を領主としてでなく私人として生活する侯爵と見れば尊敬に値すると感じた。彼は非常に明確に専門知識を持って語り、理性的に問い、誇りや虚栄心ではなく慎み深さやある種の内気さを見せたからである。彼は銅版画や戦争画を見せた。宗教令については不都合を見いだせないと言ったが、正確には読んでおらず、王子らしく眺めたにすぎないことがその後判明した。

フンボルトは侯爵の母である未亡人の侯爵夫人 (Christiane Fürstin von Waldeck, geb Pfalzgräfin von Pfalz-Zweibrücken, 1725-1816) のところで食事をした。彼女は正しいドイツ語、きれいなフランス語及び英語を話した⁷⁾。食後、夫人の図書室をみた。禁欲主義の本が多かったが、ちょうど読んでいたのはミヒャエリスのモーゼ法、モーゼ法による婚姻法、隠れカトリック主義に関するシュタルクの本⁸⁾、ビュッシングの地誌、ゾーフイエンの旅行記であった。

夕方再び侯爵を訪ねたが、今度は街の館である。人々はトランプに興じていた。侯爵はフンボルトにベルリンの芸術家、劇場について、またフンボルトのベルリンでの哲学教師であり、ベルリン劇場の総監督のエンゲル (Johann Jakob Engel, 1741-1802) やベルリン幼年学校の文学教授であり同監督のラムラー (Karl Wilhelm Ramler, 1725-1798) について尋ねた。侯爵は1779年新聞に載っていた詩を自ら書き写し、著者は誰かとフンボルトに問うた。フンボルトはおそらくラムラーだろうと答えている。

フンボルトはアロルゼンで暮らすのは非常に心地よい。社交界にはよいトーンが支配しており、分別のある、少なくとも博学のある人々が多く、地域の景観は非常に美しく、町は小さいが感じよく作られていると、全体的印象を書いている。

9月21日夜、フンボルトはアロルゼンを立ち去り、マールブルクを目指す。途中ダルヴィック式部官の農場に立ち寄った。そこには重病の夫人を見舞うために図書館員クーンが来ていた。クーンには、ヴァルデック侯国の領邦制度について尋ねた。その中で嬰兒殺しに関する特別立法の話が興味を引いた。妊娠のもみ消しは非常に厳しく罰せられ、嬰兒殺しは死刑に処せられる。妊婦には罰金が科せられ、それを病院が受け取り、出産後の母親と子どもの養育にしばらく使うというものである。これに対して、フンボルトはこれは嬰兒殺しの予防にはなるが、道徳上の問題があるとも指摘する。全国民の道徳性の大部分が基づく女性の純潔の方が、国家にとっては新しく生まれるわずかの子どもの生命より重要であるという意見を紹介している。

2. マールブルク (Marburg 9/22-9/23)

フンボルトはフランケンベルク (Frankenberg)、ミュンヒハウゼン (Münchhausen) を通って9月22日にマールブルクに到着した。フランケンベルクは、農業と毛織物業の町でカッセルのために

たくさんの毛織物を納めている等の話を、宿駅町 (Posthalter) より手に入れている。フンボルトの旅は郵便馬車を使った旅であり、運航時間等は彼らの意向が反映したと考えられる。

また「クリヒトンとの会話は一日中 (21日) おもしろくなかった。彼は非常に陽気で、会話全体が書き付けるに値しない小さな冗談でできていた」⁹⁾、という表現から、フンボルトが何を日記につけるべき重要事項と考えていたのか、推測することができるだろう。

マールブルクでは「育徳同盟」のメンバー旧友カール・ラロッシュ (Karl Laroche, 1767-1839) の弟、フランツ (Franz Laroche, 1768-1791) が不在で、その友人エンゲルバッハ (Engelbach) という男が案内した。

マールブルク大学は1527年プロテスタント系の領邦国家の意向を汲んで設立されており¹⁰⁾、プロイセンのハレ大学を模範に1737年ハノーファー選帝侯国内に新たな啓蒙主義精神で設立されたゲッティンゲン大学¹¹⁾より訪れたフンボルトには、古色蒼然と言った印象を免れなかった。

まずマールブルク大学法律学教授で評議員のセルヒョウ (Johann Heinrich Christian von Selchow, 1732-1795) を訪問した。だがセルヒョウがベルリン旅行中にプロイセンの外務大臣・ベルリンアカデミーの理事ヘルツベルク (Ewald Friedrich Graf von Hertzberg, 1725-1795) に3度招待された等々の自慢話をするのに閉口した。フンボルトはセルヒョウの国内法 (Staatsrecht) の講義を聴講したが、筆記のために途切れ途切れに話す語り口に不満を感じた。なお講義を聴く学生の態度は、彼が以前学んだフランクフルト (オーデル) 大学の学生よりよかったと述べている。少なくとも帽子はかぶっていないと。

それからマールブルク大学の財政学教授でゲーテのストラスブルク時代の友人で『ハインリヒ・シュティリングの少年時代』¹²⁾などの自伝小説で著名なユング・シュティリング (Johann Heinrich Jung (Stilling), 1740-1817) とは、主にドイツの大学における財政学の現状について、また同法学教授で宮中顧問官のエルクスレーベン (Johann Heinrich Christian Erxleben, 1753-1811) とは、フランクフルト (オーデル) 大学時代の教師ライテマイヤー (Johann Friedrich Reitemeyer, 1755-1839) の法学体系について懇談した。

さらにマールブルク大学の医学教授で、後の義兄となるミヒャエリス (Christian Friedrich Michaelis, 1754-1814) は、感じの良い若者であるが、奇妙なほどイギリスを崇拝しており、彼の部屋はイギリスの本や銅版画で際だっていた。話は、フリードリッヒ・ヴィルヘルム王子の教師として1784年ベルリンにやってきたロイヒゼンリング (Franz Michael Leuchsenring, 1746-1827) が、ユダヤ人富豪の娘、エフライム嬢 (Adele Ephraim) に求婚したものの、ベルリン啓蒙主義者の中心人物で、ユダヤ人であるモーゼス・メンデルスゾーンが反対し、1785年ロイヒゼンリングは失意のうちにベルリンを去ったことに及んだ。ミヒャエリスはメンデルスゾーンを責めたが、キリスト教徒とユダヤ教徒の結婚の困難さを洞察できなかった。フンボルトは、ミヒャエリスのようにイギリスや北アメリカではなくドイツで生活し、ドイツのいやベルリンの偏見を知ると明らかな困難さがある、と述べている。このようにフンボルトが非常に冷静で現実的な判断をしていることと、宗教的寛容さを進めてきたベルリン啓蒙主義にも内外の限界を感じていたことが理解できる。

次に、監査委員のロベルトからは、30分以上にわたってヘッセンの法律体系全般に関する「講義」を聴いた。1760年に父親の後を次いだ先の方伯 (Landgraf Friedrich II. von Hessen-Kassel, 1720-1785) は、あらゆるプロセイン的なものを模倣し新しい訴訟手続きを導入しようとしたが、カッセルの裁判所の異議により断念したなど。宗教令については、彼独自の意見を聞いた。

宗教令は、フリードリヒ大王の死後 (1786年8月17日死去)、1788年プロセインの宗務大臣となったヴェルナー (Johann Christoph von Wöllner, 1732-1800) によって、これまでの宗教的寛容に対するルター派正統主義からの反動政策の一環として、1788年7月9日に出されたものであり、

聖職者、伝道師、大学教授、学生に信条集に反する言動を取ることを厳しく禁止し、彼らを監視する「上級宗教評議会」という一種の宗教裁判所が設立されることになった¹³⁾。さらに同年12月9日に検閲令が發布され、大学教授や教師は、宗教、聖書及び宗務大臣の命令に反することを何一つする意志がないという証文を提出するよう要求されることになった。

フンボルトはこうした状況下において旅行を取行しており、面談した人々とこの問題について議論することは、彼にとっては当然の関心であった。信条集とは歴史的な教会において、宣教、教理、倫理などを規制する諸信条を収集したものであり、ルター派では特に「和協信条集」(1580-84)を設定しているという¹⁴⁾。ロベルト監査委員は、この信条集は、強奪・強要された妥当性をもたない著作である。それゆえ本来それは破棄されるべきである。だが信条集の仮定の下にプロテスタントに彼らの権利が認められた。したがってそれを破棄することは英知にふさわしくない。最も良いのは、法を英知と結びつけ、フリードリヒ大王がしたように、仮に個人や聖職者が信条集から離れても黙認することである、とした。

さらに彼は、マインツへの信書を与えてくれた。それはよい船員を得るためであり、マインツの4人の男たちへの書状であるが、風変わりにも一枚の紙に書かれており、したがってそれぞれから取り戻さねばならなかった。本来の意味でパスポートの役割を果たした。

そして古いお城に登った。塔の回廊から夕日が沈む様子を釘付けになり、フンボルトは「君たちと一緒に」この気分を味わいたいという憧れが目覚め、甘い憂鬱に耽った。ライツマンによれば、ベルリンの育徳同盟のメンバー、ヘンリエッテ・ヘルツ、カール・ラロツヒェ、そして哲学者メンデルスゾーンの娘であり、後のドロテア・シュレーゲル夫人となったブレンデル・ヴァイト (Brendel Veit, geb. Mendelssohn, 1763-1839) が思念されている¹⁵⁾。

夕方フンボルトは学生舞踏会に参加したが、女性たちは美しくなく、ダンスも下手だった。さらに大なり小なりの無分別が生じ、興奮めであったと述べている。

フンボルトは町に不愉快な印象を持つ。家々は古く、通りは不潔で狭い。山道が多く、時には梯子が必要なほどである。照明は暗く、部屋は傾いていると。大学の劣悪な状態を方伯は改善しようとしな。図書館も20000冊の蔵書のみで法律と歴史の本が一番多かった。

3. ギーセン (Giessen 9/23-9/23)

9月23日、フンボルトはギーセンに到着する。ギーセンはマールブルクより人口が少ないが、はるかに清潔に気持ちよく作られた町であるという。

宮中顧問官でギーセン大学の詩と雄弁術の教授シュミット (Christian Heinrich Schmid, 1746-1800) に会った後、統計学と財政学教授クローメ (August Friedrich Wilhelm Crome, 1758-1833) は旅行中であったため、法律学教授で評議員のコッホ (Johann Christoph Koch, 1732-1808) を訪問しようとしたが、こちらの方が有益だとして急遽監獄を見学している¹⁶⁾。

まずまだ判決を受けていない人々が収監されているところへ案内された。そこはかび臭く不健康で暗い穴のようなところであった。小さな開口部を通してのみ光が射し込んだ。既決囚の住居より劣悪であることに眼が止まった。牢番によれば、時に彼らは1年間そこに座っているほど、裁判が長くかかるらしい。ワークハウスは明るくかなり大きい、不潔が支配しており、悪臭が漂っている。ある部屋にはあまりに早く母になった騒々しい少女と不貞の妻がいた。牢番の侮蔑的な言葉は、フンボルトにはショックだった。「ひょっとすると、軽薄な男があらゆる種類の説得と人を惑わす希望によって誘惑し、ただ弱いだけで本来自堕落でなかった女の子が入っているとしたら、これらの言葉に何を感じただろうか」「ひょっとするとまだ彼女の中にある善へのすべての芽がそのような罰や取り扱いによって完全に抑圧されないだろうか」¹⁷⁾。

4. フランクフルト (Frankfurt a.M. 9/24-10/1)

9月24日の朝フンボルトはフランクフルトに到着した。

1215年の第4回ラテラノ宗教会議以後、ユダヤ人の隔離政策が進められるが、ユダヤ人を一定地区に強制移住させるようになったのは、ドイツでは15世紀後半であり、ヨーロッパでも最も典型的なゲットーをフランクフルトが形成し始めたのは、1462年のことである¹⁸⁾。だが18世紀後半啓蒙思想の影響により、ユダヤ人の関心が周囲に向けられることになったのである。

ドルヴィレ (d'Orville) 家の家庭教師ゲーリッツ (Ludwig Friedrich Göritz, 1764-1835) との会話は、公共の遊歩道の利用をユダヤ人に禁止されたことについてであった。そのためにあげられた二つの理由は、フンボルトにはフランクフルト人の非寛容の詭弁にしかみえなかった。遊歩道が小さすぎ、フランクフルトのユダヤ人が非常に多いので、彼らはすぐにキリスト教徒をそこから追い出すだろうということと、フランクフルトのユダヤ人は終始たばこを吸うので、散歩するキリスト教徒の鼻を害するだろうというものであった。

お昼は、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世 (Friedrich Wilhelm II, 1744-1797 フリードリヒ大王の甥、1786年即位) の誕生日を祝したピクニックにレンゲフェルド将軍 (Lengefeld, C. A., 1728-1801) に招待された。しかし王への空虚な賛辞や、ほとんどすべてのドイツ侯爵の健康を祝した乾杯がなされることに、フンボルトは辟易した。

食事の後フンボルトは、フランクフルトの最も裕福な商人の一人で銀行家のベートマン (Johann Philipp Bethmann, 1715-1793) と同じく商人のヒャーモット (Georg Friedrich Chamot) を訪ねた。その後ヒャーモットとコメディを観劇した。それはマインツとフランクフルトに交互に滞在し、フランクフルトの商人 (ガラスと鏡の商店主) で宮中顧問官のタボール (Johann August Tabor) の完全な負担で芝居をする一座であり、フンボルトにはすべての役者たちが重商主義の投機の対象のようにみえたという。その劇において、漁師が通常の漁師の格好をしているのに対して、その妻がパリの貴婦人の服装をしていることがフンボルトにそう思わせたのである。その後綱渡りを見物し、乗馬を楽しんでいる。

5. ダルムシュタット (Darmstadt 10/5-10/7)

フンボルトは、10月5日にはダルムシュタットに到着した。ここではゲッティンゲン大学の数学・物理学教授リヒテンベルク¹⁹⁾の甥の案内で、ダルムシュタット宮廷首席牧師のシュタルク (Johann August Starck, 1741-1816) を訪問した。彼はプロセインの前宗務・文部大臣のツェドリッツ (Karl Abraham Freiherr von Zedlitz, 1731-1793) を批判し、現大臣のヴェルナーを称揚した。彼とは主に、ベルリン啓蒙主義の代表的人物で、雑誌『ベルリン月報』の編者であり、ツェドリッツの秘書のビースター (Johann Erich Biester, 1749-1816) 及び同編者のニコライ (Christoph Friedrich Nicolai, 1733-1811) との争いについて会談した。隠れカトリック信者でイエズス会の手先という彼らの攻撃に対して、シュタルクの起こした名誉毀損の裁判と、それがベルリン高等裁判所により棄却され、裁判費用の負担を命令されたことについて話が及んだ。フンボルトは「彼らを真の光の中において知ることが、読者にとって重要でありうる」²⁰⁾と、シュタルクに対して同調的に語っている。ここには啓蒙の名の下に、個人の人権を踏みにじる現代のマスメディアの「啓蒙の弁証法」的問題に通じる問題性が示唆されている。フンボルトはシュタルクの街での評判を調べているが、人々に例外なく嫌われ、彼の牧師としての説教にもほとんど誰も出席していないと書いている。フンボルトは1788年12月ビースター宛にシュタルクについて手紙を出しているようだが、現存していない²¹⁾。フンボルトがベルリン啓蒙主義者に対してどのような態度をとっていたのか、フンボルトの真意を探るためにも興味深い。

6. マインツ (Mainz 10/7-10/10.11)

10月7日にはマインツに到着した。夏にゲッティンゲンで知り合ったマインツの司書に着任したばかりのゲオルク・フォルスター (Georg Forster, 1754-1794) とその妻テレゼ (Therese Forster, geb Heyne, 1764-1829) を訪問した。フォルスターはクックの世界一周旅行に父親とともに参加、『世界周航記』(1778-1780年)²²⁾によって評判の人物であったが、当時神聖ローマ帝国の要、カトリックの中心都市マインツにおいて、啓蒙思想を導入しようとした選帝侯エアタール (Friedrich Karl Joseph Freiherr von Erthal, 1719-1802) が、プロテスタントの歴史学者ヨハネス・フォン・ミュラー (Johannes von Müller, 1752-1809) を枢密顧問官に登用し、詩人ハインゼ (Johann Jakob Wilhelm Heinse, 1749-1803)、解剖学者ゼマリング (Samuel Thomas Sömmerring, 1755-1830) を招聘したが、そうした改革の一環としてフォルスターを司書に任命したのである²³⁾。フォルスターはフンボルトをゼマリングのところへ案内したが、そこでフォルスターはまず、全ドイツについて審判できるかのごとく振る舞うピースターの自惚れを非難した。他人の不幸を喜び、雑誌の売れ行きのみを考える啓蒙雑誌、ジャーナリズムの問題点を指摘している。またマインツの改革が不十分であることに言及した。ここに後のフランス革命の熱烈な信奉者となり、フランス革命軍のマインツ占領下 (1792, 10, 21) では、ジャコバンクラブの責任者としてドイツ史上初の共和国「ライン・ドイツ自由国家」の独立を宣言、フランスとの合併を決議したものの、フランス軍の撤退の後、パリで客死した (1794年) 姿を重ね合わせることも可能だろう²⁴⁾。

10月7日の夕方、フンボルトは再びフォルスター家を訪問したが、今度は妻テレゼと二人で会話をした。テレゼ・フォルスターはゲッティンゲン大学の古典学教授ハイネの娘であり、フンボルトは三歳年上の彼女から深い印象を与えられた。テレゼとは女性問題、友情、愛、夫婦の幸不幸について話し合った。彼女は自らの不幸な少女時代やそれがもたらした依存心の少ない性格について語った。フンボルトは、「彼女は私が話題に困らなかった最初の女性である」²⁵⁾と評するほど想像力豊かな女性であった。10月8日昼にもフンボルトはテレゼと言葉を交わしたが、彼女は旧友の不幸な恋愛事件の話題を提供したり、ルソーの小説『新エロイズ』における貴族の娘ジュリが身分違いの恋人、家庭教師サン＝ブルーに対してとった行動を批評したのである。

7. ボン (Bonn 10/15-10/16)

10月15日にはボンに到着した。16日まず聖カシウス修道院や宮殿、ポペルズドルフご用邸を訪れた。博物標本室と図書室は宮殿の中にあり、鳥や鉱物が美しく展示されてはいるものの体系的な展示がなされていない。図書室も同様だったが聖書のコレクションが目についた。「図書室には40-50人分の勉強机のある大きな部屋がある。各学生はそこに自分の机、照明、文房具を選帝侯の費用で持ち、一冊ずつ本を手に入れる。この部屋は夕方5時から7時まで開いており、休暇中のみ閉じている」²⁶⁾と当時の学生生活の一端に触れている。その後東洋語と文献学教授タデウス (Johann Adam Dereser, 1757-1827 カルメル会神父としてThaddäus a Sancto Adamoと呼称) を訪問したが、彼は文献学研究が不振であると不満を述べたが、その原因は彼自身の知識の不足にあるかもしれないと、フンボルトは評している。

8. アーヘン (Aachen 不明)

日記には記述が残っていないが、その後10日間程アーヘンにてフンボルトがベルリン時代に国民経済学の教えを受けたドーム (Christian Wilhelm von Dohm, 1751-1820) のもとに滞在した。プロイセンの枢密顧問官であったドームが、ユダヤ人の地位向上を求めて1781-83年に発表した「ユダヤ人の市民的改善について」と題する論文は、ドイツでは看過されたものの、フランス革命の指

導者でユダヤ人解放を実現したミラボー（Honoré Graf von Mirabeau, 1749-1791）に影響を与えたと言われている²⁷⁾。当時騒乱の中にあった帝国都市アーヘンにて、フンボルトは国家の任務についてドームと意見交換したものと見られる。ザウターによればそのきっかけとなったのはヴェルナーの宗教令であった²⁸⁾。

9. ペンペルフォルト（Pempelfort 11/1-11/4）

11月1日より、フォルスターの提案でデュッセルドルフ近郊のペンペルフォルトに哲学者ヤコービ（Friedrich Heinrich Jacobi, 1743-1819）を訪ねた。話題は主に形而上学上の対象に関してだったが、着想豊かでおもしろい議論ではあったものの、フンボルトにとって理解困難な話でもあった。いわゆるヤコービの直観や信仰哲学について、また知覚と感覚の差異およびそれに関するカントの教説についてなどである。「空間と時間はアプリオリな理念であるということは、カントの場合、彼がその他の考えを基礎づける根源的な考えではなく、むしろすでに作成した彼の体系を支えるための間に合わせであった。空間と時間はアプリオリな理念ではなくむしろ現実の知覚である」²⁹⁾とカントを批判した。その他、詩人と形而上学者の天才の違いについて、愛について、人相学者ラーヴァーター（Johann Kaspar Lavater, 1741-1801）について、宗教的理念とその欲求について論じた。11月4日、再び信仰哲学について議論している。「我々は我々の外の物を直観する。これらのものは本当のものであり、我々に直観を与える確信を我々は信仰と名づける。この確信は我々にとって非常に強く必然であり、その結果あらゆる残りの確信、それどころか自己意識さえそれに依存している」という一方で、「人間にはあらゆる他の諸力から独立した活動的な力、つまり信頼できる秘密の法則に従って、あらゆる傾向に逆らって行為する力が存在する。この力は人間の自由意志である」³⁰⁾とフンボルトには矛盾に感じる命題をヤコービは主張したのである。

11月4日にペンペルフォルトを離れ、11月8日にゲッティンゲンに戻っている。ゲッティンゲンからダルムシュタットまで南下、マインツからデュッセルドルフ近郊へとライン河を下り、その後東へゲッティンゲンへとおよそ三角形を描くような旅をしたのである（図1参照）。

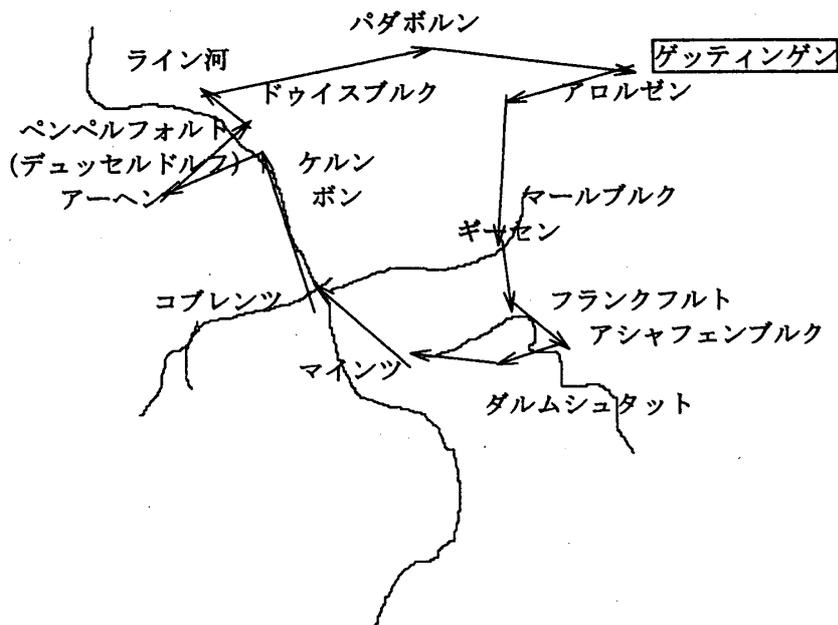


図1：フンボルト旅行地図

II 考察

上記のように1788年9月18日から11月8日まで、ゲッティンゲン大学生のフンボルトは52日間に及ぶ長期旅行を行っている。当時鉄道はなく郵便馬車によるゆったりとした旅行であったことを我々は想起しなければならない。ただ従者ヨハンを伴い、フランクフルトでは、「赤い家」というドイツで最も大きくきらびやかな旅館に泊まることのできたゆとりある旅であったことは間違いない。当時にとって常識的なことも、今日の我々から見れば異質なものとして見えてくる。フンボルトは単に風景を第三者的に観光したわけではない。確かに教会の塔から景色を眺めたり、ライン河の風景を楽しんだり、マールブルクの街の様子を観察したりしている。だがむしろ旅行の目的といえるのは、様々な人物と直接出会い会話することにより、フンボルトがこれまで獲得してきた知識の正当性を検証することだったのではなかろうか。間接的に話を聞いていた人物の人となりや直接見、肌で感じることにより、経験の再構成、情報の身体化を図ろうとしたように思われる。今日我々が観光地で訪れる美術館や博物館はまだ整備されていない。多くは宮廷の侯爵により所有されている。そのようなものを見ることができるのは、限られた人間だけである。

さて以上のような18世紀末のドイツの社会構造において考えられる「フンボルト的教養」を生み出す条件について考察してみよう。まず第1に「フンボルトと他者をつなぐ（媒介する）ネットワークシステムの成立」である。書簡による紹介、推薦という制度・慣習。フンボルトを直接出迎えたり、知人のところへ案内する制度・慣習。日記によると完全にアポをとっているわけではない。自ら訪ねていっても、また連れられていっても不在だったりしたケースは多い。いずれにしても何らかの形でフンボルトという客人をもてなすホストの時間的精神的余裕が感じられる。第2に「多様な人間との出会いとその道の専門家と直接会って話をすること」である。階級上の限界はあるものの、フンボルトが出会う人物は実に様々である。例えば大学教授についていえば、専門は法律学、財政学、医学、文学・雄弁術、文献学などである。しかもマールブルク大学法律学教授であり評議員セルヒョウなど大学の中核にいる人物や、ボン大学東洋文学のタデウスなど著名な学者を訪問している。フンボルトによれば当時ボン大学学生は200人であったというが、大学というユニバーシティがまさに顔の見える小宇宙であったといえる。もちろんフンボルト自身は様々な話題に対応できるだけの知識見識を持たねばならない。第3に「話題の人物に直接会って、その人の考えを直接聞くこと」である。ベルリン啓蒙主義者と紛争を起こしていたいがわしい人物とされていたシュタルクや、同じくベルリン啓蒙主義哲学者モーゼス・メンデルスゾーンと論争を起こしていたヤコービに会って話を聞くことは、ベルリンの啓蒙主義サークルで育ったフンボルトにとっては取り方が難しいスタンスであったに違いない。第4に「女性との親密な時間空間を持つこと（親密圏の成立）」³¹⁾である。家族問題、女性問題、愛・性の問題、人生の問題など、公の場では語りづらい話題をマインツではテレゼ・フォルスターと語ることにより、内面性に沈潜すると同時に、異性の目から人間知を深める。第5に「日記の作成による経験の記述・整理と記憶化」である。経験がどのように消化されるのが重要である。当初ヘンリエッテら育徳同盟のメンバーに開示する意図があったようである³²⁾。

この日記においてはフンボルト自身、教養とは何か、いかに自己形成すべきかについての理論的な考察を試みていない。あくまでも旅行中の出来事を記録したノートである。フンボルトは、その後カロリーネ・フォン・ダッヘレーデン (Karoline von Dacheröden, 1766-1829) と婚約、ベルリンにて司法官補に就任したものの、1年後1791年6月に辞職し、カロリーネと結婚、ブルクエルナーにて静かな研究生活に入った。1791年8月16日フォルスターへの書簡において、辞職の理由に関して「この世において個人の最高の諸力と個人の最も多面的な形成 (Bildung) ほど重要なものは何もないのであり、それゆえ真の道徳の第一法則は、汝自身を形成せよ (bilde Dich selbst) であ

り、それに引き続いてのみ第二法則、つまり汝があるところのものによって他者に影響を与えよ (wirke auf andre durch das, was Du bist) が生まれるのである³³⁾と記す。これはシュプランガーが人間性理念 (Humanitätsidee) へのフンボルトの最初の決定的で個人的な告白というように³⁴⁾、その後1792年『国家機能限界論』1793年「人間形成の理論」(Theorie der Bildung des Menschen ライツマン命名)へと結実したように、フンボルトの「人間形成論」は1790年代初頭に成立したといえる。

そうであるなら1788年ゲッティンゲン大学時代のフンボルトの「教養旅行」は、後の自覚的理論とは彼の意識レベルにおいて直線的な因果関係を結ぶことはできない。しかし彼の旅行において実質的になされた経験の広がり、多様性は、後の理論化のための素材・事例のいくつかを提供したものと解釈できるのではなかろうか³⁵⁾。そして何よりも今日の我々の視点から見て教養を生み出す旅の条件を満たすものと評価できるのではなかろうか。

ウルリヒ・イム・ホーフの『啓蒙のヨーロッパ』³⁶⁾を読むと、第4章「啓蒙のにない手たち」として例示したベルリンのヘンリエッテ・ヘルツのサロンやマインツやボンの読書協会、また第6章「ひろい世界に眼を開いて」において、旅行記ブームをもたらした『世界周航記』の作者ゲオルク・フォルスターなど、不思議なほどフンボルトと関わる人物や出来事が登場する。その意味でフンボルトはまさに歴史的イベントに立ち会った人物なのであり、この日記はそれらについての資料である。

その意味では18世紀の啓蒙運動の一員なのであるが、彼の行動様式はエリアスの『宮廷社会』³⁷⁾に基づけば、19世紀以降の公・私職業によって区別される以前の旧体制的な「上流社会」の一員であることにはかわりはない。人間観察術と取扱法という術策をもって、彼らから本音を引き出そうとする。多くの場合、年長で地位もある彼らと出会い、暗に会話をリードし、それを観察描写する。そこには自由な交際を志向しつつも、旧体制の秩序慣習などの行動様式から完全には解放されてはいないフンボルト(宮廷的合理主義的に人々が感情を抑圧する理性的な行動様式をとるからでもあるが)が、まるで幾重もの網の目で編まれている人間関係社会に規定されている点から自己をどのようにずらせばよいのか思案しているように見えるのである。フンボルトの内面についての彼自身の本格的な考察は、今しばらくの時を必要としたといえよう。

註

- 1) Humboldt, W. v., Tagebuch der Reise nach dem Reich 1788, in: ders. G. S., hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften. Bd. XIV, Berlin 1916, S. 1-65. フンボルトの人間形成論に関する先行研究としては、江島正子『フンボルトの人間形成論』ドン・ボスコ社、1996年。Benner, D.: Wilhelm von Humboldts Bildungstheorie. Weinheim 1995. 等を参照。当該の旅日記についての考察は、Sauter, Ch. M.: Wilhelm von Humboldt und die deutsche Aufklärung. Berlin 1989. S. 178-223. を参照。啓蒙期における旅の意味、旅と人間形成に関しては、Maurer, M. (Hrsg.): Neue Impulse der Reiseforschung. Berlin 1999. Inhalt: Bildung und Reisen. in, Bildung und Erziehung. 53. Jg., H. 2, Juni 2000. 等を参照。
- 2) 中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂、1995年。
- 3) Humboldt, a. a. O., S. 1.
- 4) フンボルトにとってヘンリエッテのサロンが果たした役割については亀山健吉『フンボルト』中央公論、1978年、32-34ページ。拙論「フンボルトの思想形成—ベルリン啓蒙主義による教育とその離脱過程を中心に—」中国四国教育学会編『教育学研究』第45巻、第1部、2000年、41-46ページ参照。フンボルト兄弟の他、シュライアーマッハー、シュレーゲル兄弟などを集めたサロンについて、ヘンリエッテ自身による回想記は、ヘンリエッテ・ヘルツ「ベルリン・サロン」『詩人たちの回廊』(ドイツロマン派全集 第19巻) 国書刊行会、1991年。ベルリンのサロンの思想的意味については、大貫敦子「排除された〈私〉の

- 言葉」、エンゲルハルト・ヴァイゲル「ラーエルのソファ」『思想』No.925、2001年6月号参照。
- 5) Sauter, a. a. O., S. 173ff.
 - 6) ザウターは、侯爵の宮殿にどの程度啓蒙思想が受容されているのか、フンボルトは知ろうとしたのだと判断する (Ebd., S. 179)。
 - 7) ドイツ宮廷人がフランス語を使い、「ドイツ語ができないドイツ人も決して珍しくはなかった」。マックス・フォン・ベーン『ドイツ十八世紀の文化と社会』三修社、1984年、6ページ。
 - 8) フンボルトがダルムシュタットで会う宮廷主任牧師シュタルクの本。Über Kryptokatholizismus, Proselytenmacherei, Jesuitismus, geheime Gesellschaften und besonders die ihm selbst von den Verfassern der Berliner Monatsschrift gemachten Beschuldigungen, mit Aktenstücken belegt, Frankfurt und Leipzig 1787.
 - 9) Humboldt, a. a. O. S. 18.
 - 10) ハンス＝ヴェルナー・ブラール『大学制度の社会史』法政大学出版局、1988年、106ページ。
 - 11) エンゲルハルト・ヴァイゲル『啓蒙の都市周遊』岩波書店、1997年、287-320ページ。
 - 12) Jung Stilling, Heinrich Stillings Jugend. Berlin/Leipzig 1777.
 - 13) ベーン、同上書、204ページ。
 - 14) 同上書、571ページ。
 - 15) Humboldt, a. a. O., S. 23. 「君たちと一緒に」 an Eurer Seiteという表現が、この旅日記が誰のために書かれたのかを推測させる。下記註32) 参照。
 - 16) John Howard, The State of the Prisons, London 1784. (ジョン・ハワード『十八世紀ヨーロッパ監獄事情』岩波書店、1994年) 参照。
 - 17) Humboldt, a. a. O., S. 26.
 - 18) 大澤武男『ユダヤ人とドイツ』、講談社、1991年、46ページ以下参照。
 - 19) 経験に重きを置いた近代的なゲッティンゲン大学の発展にリヒテンベルク (Georg Christoph Lichtenberg, 1742-1799) が果たした役割についてはヴァイゲル、同上書、306-320ページ参照。
 - 20) Humboldt, a. a. O., S. 34.
 - 21) Ebd., S. 36.
 - 22) ゲオルク・フォルスター『世界周航記(上)』(17・18世紀大旅行記叢書[第Ⅱ期]第7巻)、岩波書店、2002年参照。ウルリヒ・エンツェンスベルガー『ゲオルク・フォルスター』関西大学出版部、2002年参照。
 - 23) ベーン、同上書、174ページ。
 - 24) ギゼラ・ホーン『ロマンを生きた女たち』、現代思潮社、1998年、34-37ページ。
 - 25) Humboldt, a. a. O., S. 41f.
 - 26) Humboldt, a. a. O., S. 54.
 - 27) 大澤武男 同上書、74ページ。
 - 28) Sauter, a. a. O., S. 184.
 - 29) Humboldt, a. a. O., S. 58. ヤコービのカント批判がその後のドイツ観念論を発展させたことについては、R・クローナー『ドイツ観念論の発展 カントからヘーゲルまでⅡ』、理想社、2000年、3-17ページを参照。
 - 30) Humboldt, a. a. O., S. 61.
 - 31) 「親密圏の成立」と教養形成については、大貫敦子参照。彼女は、市民的公共圏の成立基盤を親密圏と公共圏の分離にもとめるハーバーマスの説を紹介。つまり小家族の人間関係によってなりたつ親密圏が「人間」としての自覚と自立的自我が育まれる場であり、ここで人間形成をうけた個人が公共圏(客間の社交も含め)に参加するという説である(93)。またベルリンのサロンを主催したユダヤ人女性としては、ヘンリエットと双璧であるラーエル・レーヴィン (Rahel Levin Varnhagen, 1771-1833) について、「彼女の

自我は、夫婦間や恋人など極めて小さな親密圏でしか披瀝できない内面性に閉じこもっていない。例えば彼女の『屋根裏部屋』のサロンでは恋愛関係とは別の次元で男性との間で心のかよう会話が可能であった。また、親密な感情を吐露した手紙も受取手がさらに他の人に渡して複数の人が見ることを要求している」(93)として、ラーエルのサロンが市民階級にも貴族階級にも対応物のない、独特な内面性の共有の場であったことが、知識人、学生、作家、俳優、宮廷関係者などをひきつける魅力となった、と指摘している。

- 32) Humboldt, a. a. O., S. 65. ライツマンの註による。
- 33) 拙論「フンボルトの人間形成論と近代教育思想」小笠原道雄監修、林忠幸、森川直編『近代教育思想の展開』福村出版、2000年、79-80ページ。Humboldt, W. v. : *Bildung und Sprache*. Hrsg. von Menze, C. Paderborn 1985, S. 144f. (C. メンツェ編、K・ルーメル、小笠原道雄、江島正子訳『W・v・フンボルト人間形成と言語』以文社、1998年、13ページ参照)。
- 34) Spranger, E. : *Wilhelm von Humboldt und die Humanitätsidee*. Berlin 1909, S. 46.
- 35) フンボルトはゲッティンゲンに戻って書き記した日記(1788/12/9)の中で、「人はあらゆる種類の多くの状況に身を置かねばならないという原則が私の中に非常に強くあり、それゆえ初めての状況はみな心地よいのである」(Humboldt, Göttingen 1788. in, a. a. O., S. 69)と述べている。ここにはフンボルトが後に『国家機能限界論』の中で定式化した教養の2条件「自由」と「状況の多様性」のうち、後者がすでに意識化され始めたことを物語っている。
- 36) ウルリヒ・イム・ホーフ『啓蒙のヨーロッパ』、平凡社、1998年。
- 37) ノベルト・エリアス『宮廷社会』、法政大学出版会、1981年。